

〔翻 訳〕

大地との新たな同盟： 生き物との外交術的共棲について*

バティスト・モリゾ
中原 隆幸, 須田 文明 [共訳]

I 大分割の終焉：ハイブリッドなポスト・ネイチャーへ？

大地への帰還（もし大地に帰還せよ、という命令があるならば）は、その目的地が正確に示されることを必要とする。すなわちどのような大地へ、なのか。大地に棲むための、どのような存在論的集合体 *assemblages* へ、なのであろうか。大地とは、ここでは、生物共同体の生活場所としての地上の表面である。すなわち我々が住んでいる土 *sol*、また我々の生存を基礎づけている土である。この生活場所の哲学的地図は、今日、二つの大きな物語（我々は、そこでの棲息可能性について疑うことができる）により独占されている。我々はここで別の可能な地図を描きたい。それは、きわめて遠くから大地を眺望するような宇宙論的な大きな物語に代えて、共有された大地でのマルチ・スピーシーズな *multispesifique* 共棲を考えるために、常に詳述された、概念的で叙述的な文法を対置することによってである。

結局のところ、人新世 *anthropocène* に直面して、人類と自然の間の関係を語るに際して、我々は、二つの大きな物語の継承者なのである。最も古く、威厳のある最初の物語は大分割であり、それは、人類（目的）と自然（手段の貯蔵庫）との根本的切断に基づいている。ここでは、人間社会に役立つ外側の自然（人間社会は

自然から分離したとされている）をより効率的に領有することが進歩なのである (Descola, 2005; Latour, 1999)。「人新世」という考えは、こうした物語が終わっていることを示そうとする。「人新世においては、人類は地球の歴史を変化させる。地球は翻って、（不平等に）人間社会を襲う。自然から解放されたと主張した『近代人』の人類史は、自然との無数の反作用の制約にとらわれている」(Bonneuil, 2015, p.36)。

その結果として、より最近の、（特定の人新世を特徴付けている）第二の大きな物語が主張するのは、我々はこの古びた世界を脱却し、「ポスト・ネイチャー」に突入したのであり、ここでは自然はもはや我々とは区別されず、（地質学的力となった）人類の活動によって共同構築され、もはや我々にとって異質なものは何もない、というのである。良い *good* 人新世の主張者により擁護されるこの第二の大きな物語は、ハイブリッドなテクノ・ネイチャーを打ち立て、そこでは、ノン・ヒューマンはヒューマンとハイブリッド化されており、これまで「自然」と呼ばれていたものの、あらゆる他者性と外在性、異邦性を除去するのである。それはこうした新しい時代への移行に乗じて、その元来の危機状況をチャンスへと転換させようとする。しかしながら、すぐに多くのコメンテーターたちが、エコロジー的争点の立場からのこうしたアプローチの問題ある含意を批判した¹⁾。

* 本論文は Baptiste Morizot. (2017) “Nouvelles alliances avec la terre. Une cohabitation diplomatique avec vivant”, *Tracés*, no.33, pp.73-96. の全訳である。なお、著者本人より本訳出に関する許諾は取得済みである。

ここで私にとって興味深いのは、それぞれ、できることのすべてを動員しようとする、こうした二つの対立する図式(大分割か、それともハイブリッド化か)は、実のところ、人新世を人類に語るための、別のタイプの物語の可能性と必要性を隠蔽していることを示すことである。「大地への帰還」の運び手(ここでは、我々を運んでいる生きた地域)は、航海の針路を正確に示すことを要求しているのである。すなわち、それは、切断された自然・素材へか、それとも均質化されたハイブリッドへか、という二者択一とは別の方向へと進むことができるであろうか、が重要なのである。

大地のこうした排他的な二つの地図を免れる地域を登場させようとして、我々はこれらの地図が共有する隠されたことについて探求することができる。こうしてハイブリッドなポスト・ネイチャーの仮説が大分割のラディカルな逆転などではないことが明らかとなる。結局この仮説は、現実の他者性と関係することを拒否することで、大分割と共通している。革命の口実の下に、こうしたポスト・ネイチャー仮説は、その根本的性質の一つを維持し、その機能は、西洋近代の資源略奪的 extractivist な社会的メタポリズムを正当化することである。伝統的な大分割においては、現実の他者は存在しない。というのも、すべてのノン・ヒューマンはモノへと翻訳されるからであり、つまり(ヒューマンが構成している)目標のためだけの手段に翻訳されるからである。それは物象化することによって、「他者」とは妥協する必要がない。ハイブリッド化においては、我々はたしかに他者と関係しようとしているが、それは他者がすでに十分に我々とハイブリッド化されている限りでしかなく、つまり我々に均質化している限りでしかない。つまり我々が他者からその還元不可能な他者性を除去する限りでしかない。

ところが、他者性を除去しようというこれらの試みにもかかわらず、我々の生物共同体に棲んでいる生き物たちが、他者性を構成しているという事実は、人新世に抵抗していないだろう

かと問うこともできよう。こうした生き物たちはなるほど、我々の技術システムによって変形され、影響されているが、我々が共有する大地を構成しており(生物共同体がエコロジー的ダイナミズムを基礎づけている)、我々の生存を可能とし、他者として自らを維持しているのではないだろうか。共同体のエコロジーの観点からは、人新世とは、残りの生き物との、接近した、一般化された、事実上の共棲の登場の別名である。つまりこれらはもはや外側にいるのではなく、(放恣なコード化にしたがって純粋な)アクセス不可能な手つかずの、敵意ある野性的外側の中に、野生 wilderness の中にいるのではない²⁾。これらは我々の間にいる。他者(モノでもなく、均質化されたハイブリッドでもない)としての生き物は、ヒューマンに対して、人新世の観念に存在するきらめきを信じないように考えなおすことを要求している。こうしたきらめきは、人新世の成功の自惚れの土台にある。すなわちヒューマンは地質学的力であり、地球という惑星全体が、我々とハイブリッド化しており、我々にとってアクセス不可能なもの、異邦的なものは何も存在しない、と自惚れるのである。

生き物を他者性として考えることは、おそらく、彼らが棲んでいることを承認することと関連している³⁾。これらの生き物は、他の共棲者(我々のことである)のように、地域に棲んでいる。彼らの固有な地政学とともに、またその地域感覚とともに、地域の占有の仕方、決定的な場所を地図化するやり方、自分の家にいる居心地の良さをもって棲んでいるのである。つまり、これらの生き物はそれ自身の存在論理を有しており、それ自身の必要性和ニーズ、その生きる様式、生物共同体とのその関係や紐帯、その習俗(非物質的な地域整備)、種内部での、種間でのそのコミュニケーション様式(マーキング、さえずり、縄張り、態度、化学的メッセージ)、他者の行動に適應することを自らに可能とさせる行動的可塑性、彼ら自身の平和装置(領土性、回避、巢の隔離など)、他の種との種

別的な活気ある同盟（相互主義、協力など）、つまり彼らの因習を有しているのである。

ハイブリッド性という観念を一般化することで、このように他者が還元不可能に棲んでいるということが放棄されてしまう。したがって生き物の他者性は、もはや、隔絶した、手つかずのままの人新世にあるのではなく、それ自体で我々の間に、それ自体として *parmi nous par soi-meme* ある。生き物は手つかずではあり得ず、我々の周りに、我々の間にいる生き物は野生性 *féralité* の部分を保持しており、それは生き物が再び活発になる *repandre la main* という事実結びつけられる。ここでは、あらゆる形態の生命（進化的な潜在力の観点から考えられる集団 *population* のみならず、生物共同体）が野性的であるとされ、これは、人間の技術活動との接触により変容させられるが、再び活発になる、つまり、生成の過程でダイナミズムを生む。このダイナミズムはその固有な生態学的・動物行動学的な進化的力によって導入されるのであり、厳格な本能や、それをゆがめる人間活動の効果によってではない。

この点に触れたがらない人々にとっての逆説は、まさに、我々による農業生態系への機械的な、もしくは完全なコントロールからではなく、こうした力からこそ、我々の物質的生存条件が生じていることである。あらゆる生産システムは、それが引き継いでいる生態学的＝進化的なダイナミズムに依存している（すなわち、光合成、窒素循環、食物連鎖など）。我々の生命条件もまた、こうした力から生じている（我々自身がそれに由来している）。このように、人新世のポスト・ネイチャーの理論家たちの概念的誤謬は、別の生命形態との親密で錯綜した接触と、ハイブリッド化（こうした生命形態が消失している）とを取り違えることになる⁴⁾。

II 別の物語の可能性

こうして、生き物の還元不可能な存在を正当に扱うような実践に立ち返るための、こうした

探求を促す理論的問題は、共有された大地での、ヒューマンとこれらの生き物との間の関係を別様に語ろうとすることに帰結する。完全なハイブリッド化と、大きな分割との間で探求されるべき空間をこじ開け、発見するために、今や、哲学的問題設定が以下のように追求される。すなわちどのように、近代の二重の切断に逆戻りすることなく、彼らの構成的他者性を認めるのか。（アイデンティティ及び空間の間での）切断なき他者性をどのように考えるべきか。共通の生息地 *habitat* において、その差異を認めつつも、この生き物の世界をどのように構成し、またこれとどのように互いに妥協するか、という問題である。

ここでは、ノン・ヒューマンな生き物への我々の関係を想像するために、別なジャンル（私はこれを「外交術的共棲」と呼ぶ）の草稿を提示することが重要である。外交術的共棲は、もはや単なる資源でも、モノでもない存在に対してどのような関係を展望すべきかについて語る、ある種の物語であり、簡便なフィクションである。こうした存在は、区別しがたいほど我々に絡み合っているが、しかし、そこで自らの他者性を喪失することはない。なるほど、外交術的物語は、エコロジー的問題のすべてを解消することはない。それが問題を解決するかどうかは確かではない。しかしこの物語はまず、実践的、理論的想像力を解放することに資するために、既存の大きな物語を揺るがそうとする。

この外交術的物語は、おそらく、まずはコンフリクト状況に適している（ヨーロッパでのオオカミ、Sundarbansの虎、Turkana湖のゾウなど）が、共棲をめぐるあらゆる問題にすぐに転用される。すなわちノン・ヒューマンのポピュレーションやエコロジー的関係が論じられ、共棲が問題となっている場である（インドのハゲワシ、消失するミツバチ、生産力主義的農業に苦しむ土壌微生物）。おそらくそこに、人新世の新しい大地の、一つの側面があり、固有な利害、しかも我々のそれと区別できないような利害を

持った存在が、我々の間に登場しているのである。すなわちこれらの存在は我々に曝されており、我々はこれらに曝されている。問題は、「お互いに曝されて生きていること」が意味することを定式化するのに適した物語を想像することに帰着する⁵⁾。

政治的エコロジーに適用される外交術的共棲という考えにおいては、断絶した、対立する二つの極(自然と人類)の間での二元的対立はもはや存在しないし、サイボーグのポスト・ネチャーにおける混交もハイブリッド化も存在しない。ヒューマンとノン・ヒューマンなその他の共棲者(受粉ミツバチ、流域の生物共同体、間隙性 interstitiels のオオカミ(訳者:我々の碁盤目上の空間の隙間にオオカミが縄張りを展開していることについて Morizot, 2016 参照)、珊瑚礁、インド・ハゲワシ、土壤微生物など)とのあいだの共棲が存在する。これらは我々の間にいるが、しかし「それ自体として par eux-meme」いるのである。

ここにこそ、現代環境研究領域における、こうしたアプローチの種別性が垣間見られる。保全生物学の支配的パラダイムは、生物多様性と自然遺産(使用価値と非使用価値を有する)の観念に基づいている。こうした観念は、一連のすべての問題を効率的に解決するが、我々の間にいる別の生き物たちの存在様式の問題を刷新することに失敗している。棲んでいる唯一の生き物としての人類の存在論的特異性を維持することで、こうした観念は、すべてのノン・ヒューマンを人類の受動的環境へと排除するのである。人類は、多様なやり方で、この環境を利用し、保護し、保全するように命じられているというわけだ。ここではむしろ、問題含みのエコロジー的状况への、別の探求の仕方の実践的効果を検討することが重要である。すなわちこうした方法は、我々の間にいて、それ自身として存在している生き物が、共棲者として——「我々の」環境としてではなく——考えられるべきである、と提起するのである。彼らの地政学的勧誘の観点から生き物を「活性化させる」

ことが重要なのである。すなわちいかにして彼らは、特別な意味において、我々と同盟し、厄介なものとなり、役割を演じ、闘争に入り込むことができるのだろうか、である。

第二の点は、共棲の様式に関連する。現代の動物主義的 animalistes 理論は、動物の倫理的重要性(Singer, 1975)について、彼らに政治的地位(市民権と主権、住居)を付与することの必要性(Kymlicka et Donaldson, 2016)について、もしくは、その知られざる認知的能力(De Waal, 2016; Hauser, 2001)について検討するが、政治的な含意はなしにである。我々のアプローチの特徴は、むしろ、生き物の認知的、(広い意味での)相互行為的コンピテンスに関する発見をまじめに捉えることにあり、人間との、また他の生き物との関係のエコロジー的レベルで、相互依存効果を産出する彼らのやり方を検討し、またこうした生態学的=進化的な力が、新しい同盟の形で、問題含みの状況において発明されるべき妥協 modus vivendi に彼らを入り込ませるさいの可能性を検討することである。生き物のこうした認知的コンピテンスは、土から切り離されてはいない。すなわちそれは、永続的なエコポリティックな相互作用を通じて、何よりもまず大地に棲んでいるインテリジェンスなのである。問題の中心は、これらの力によってもたらされる、彼らに対する実践的關係を考察することである。すなわち、これらの生き物は行為し、コミュニケートし、集合的關係の平穩化の装置を示しているいじょう(Morizot, 2016)、二元論の外側で、彼らに対する我々の關係の問題を提起することが検討できるようになる(すなわちこうした二元論は、「自然」科学の決定論的タームに従って、彼らを厳密に考えることにあり、こうした科学は、原因と法則の中へと、コミュニケーションと行為のすべてを翻訳するのである)。つまり彼らに対して、外交術的な相互作用に類似した状況を検討することができるようになるのである。

Ⅲ 生き物との外交

(1) なぜ外交について語るのか

イザベル・スタンジェール (Isabelle Stengers, 2006) こそが、外交官の相貌を大使館(彼がそこで錆び付いている)から救出し、糊のついたカラーから解放し、彼を、国民国家よりもいっそう異邦的で紛糾した世界の間での仲介人とさせたのである。ブリュノ・ラトゥール (Bruno Latour, 2012) は、存在様式を対話させるために、この外交官に決定的役割を与えることに貢献した。私は、彼らがヒト種を超えて、彼らの技芸を行使するように、彼らをリクルートしようとした (Morizot, 2016)。ここでは、外交官とは概念的な人格であり、現場のオペレーターであり、彼らはヒューマンに対するノン・ヒューマンの代弁者の役割ではなく(たとえラトゥールのなこうした役割が部分的には彼らに関連していようと)、逆であり、ノン・ヒューマンに対するヒューマンの代弁者の役割を果たすのである。すなわちこの外交官は、我々を代表することではなく、超ヒューマンな形態の協定と合意を交渉し、実施するべく、ノン・ヒューマンに対して我々を慎ましく提示し、彼らの習わしを理解し、特定の礼儀作法を適用し、コミュニケーション手段を構想することを任務としているのである⁶⁾。

今や我々は、外交術の共棲のこうした動機からする類推によって、別のジャンルの物語をたどつどしくも語ろうとすることができる。たどつどしく語るのは、実行が困難だからであり、それがこの言いよどみにあり、自然的存在論の前提そのものによって長きにわたり鎮錠されてきた、可能なる物語の領域を再び開くことが重要だからである (Descola, 2005)。こうした存在論はノン・ヒューマンとのコミュニケーションと協定という考えを排除する。それは、これらを存在として、モノ以上の存在として考えることを排除するのである。

ブリュノ・ラトゥールが示したように、政治的エコロジーはノン・ヒューマンを政治に入ら

せた(自然と政治の意味をともに転換させることで)。政治的エコロジーはこれらに存在者の地位を再び与えるのである。これらはもはや、法則によって統御される素材(マチエール)なのではなく(資源としてこれを捉えるためにはこの法則を理解しなければならない、というような)、これらは存在として立ち上がるのである。これらが立ち上がる、とはどのような意味であろうか。

ノン・ヒューマンは、声を上げる、という意味で立ち上がるのではない。アテネの人がポリスの自らの権利を表明するためにロゴスを用いるようには、また政治的少数者がついには、公的発話においてそのエンパワメントを見いだすようには、ノン・ヒューマンは発話しないのである。かつて近代人の形而上学によって平板化された世界の上に復興するという意味で、これらは立ち上がるのである。こうした平板な世界では、唯一、起き上がっているヒト・パーソン(政治的一目標である)と、平板な素材、資源、純粋な手段(合理的な活用、もしくは、精神的リフレッシュのための地方的サンクチュアリ化しか要求しない)しか存在しなかったのである。これらは立ち上がり、こうして図らずも、パーソンの地位を獲得するが(それが法的であろうが、存在論的な地位であろうが、ノン・ヒューマンに適用されるその地位の妥当性は、討議され、議論可能である)、それは、まだなお発明されていない地位を持った様々な存在の相貌であり、我々が知っているのはせいぜいのところ、これらが我々の注意を要求していることである。また我々が知っているのは、これらが、少なくとも、我々がこれらを以下のように考慮し、これを評価することを要求していることである。すなわち最初は、しばしば脆弱な手段として(というのも、それが始まるのはいつも、こんなふうにしてだからである)、しかしその次には、(まだなお完全には概念化されてこなかったような形態の下で、存在への権利を持つ)目的として、存在として、ノン・ヒューマンを考察し、評価するように要求しているの

ある。

これらのノン・ヒューマンのいくつかのものについては、相変わらず、一部は手段のままであろうが(食って行くためにはしかたないから)、しかしこれらは「手段以上のもの」となったのである。現代の政治的エコロジーの根本的問題提起が取る形態は、ブリュノ・ラトゥールにより記述される「ためらい」の形態である。すなわち「我々は、存在の配分を間違えて、手段を目的と(あるいはその逆に)取り違えてしまったのではないか」(Latour, 2012, p.457)。これらのノン・ヒューマンが、(まだなお謎に満ちた意味で)目的でもあるという事実は、これらを手段として使用するさいの我々のやり方を必然的に変化させるのである。

私は仮に、こうした背景において、ノン・ヒューマンを「共棲者」と呼ぶことを提案しよう。共棲者は、私が、なぜそうなのかという理由を理解する以前に、機能的な概念的解決策のように思われたのである。このタームの利点は、どのような存在論的カテゴリーの下に、どのような倫理的、もしくは法的な地位の下に、これらを整理するかを、すでにわかっていると主張することなしに、これを名付けることができることと関連している(こうしてこれらを発明するために必要な時間を稼ぐことで——別のモノのために作られた地位を、これらに投影するのでなく——)。共棲者は、(我々がこれらと維持している)ある種の根本的關係から推論される名前である。それは、これらが何ものであるかに応じてではなく(我々、近代人は、なおこれを知らないのだから)、これらが我々とどのように接触しているかに応じて、すなわち我々が、どのような様式で、お互いに曝されているかに応じて、これらを名付けることである。

結局、ノン・ヒューマンが立ち上がるとすればそれは私たちの間でであり、我々のまっただ中で、社会 socius の中で(そこには人間だけが棲んでいると思われていた)、である。ここにこそ新たな外交術的切り札がある。すなわち、国民国家——自らを主権的であると信じ、市民(す

べて均質化され、接続され、権利において平等な人格)によって棲まわれている——を考えてみよう。そこに、突然、あらゆる隙間に、それぞれの家の間に、他者が立ち上がって、言い出すのである。「私たちだって、共棲者なのです。でも、あなたがあなたのものであるというこの大地では異邦人なのです。言葉を持たない私たちも、それが私たちの大地だと言います」。受粉ミツバチ、大珊瑚礁、パンジャブのハゲワシ、ヴァール県のオオカミ、これらすべての土着民が立ち上がって、それぞれが自分のために言う。「私もまたここに棲んでいるんです」。最後に、彼らは何も言わなくなる。彼らは「ドアの外で」デモを行う⁷⁾。論争の中に登場することで、損害を与えることで、もしくは死ぬことで、彼らは集団的な注目を引くために大々的に、科学者や市民を代弁者として雇うのである。彼らは自分たちからはドアをたたかないときでも、彼らを見つけるナチュラルリストや活動家、生態学者、気候学者が、自ら代弁者となり、彼らを政治へと引っ張り上げるのである。なんと騒々しいことか。

こうした背景では外交術的業務は顕著に変化する。すなわちもはや、遠く離れた所から、自然との外側のフロンティア、もしくは植民地の前線へと、外交官(これらの新しいエージェントたちと議論するよう召喚される)を急派することが重要なのではない。もはやこの外交官は野生 wilderness とのフロンティアにいるのではなく、保護区のなかにいる生物学者(あるがままの自然を監視するかのよう)なのでもない。つまり外交官は我々の中に、我々の間に、(すくっと起き上がり、存在へと立ち上がった)何ものかと妥協しなければならない場で、常に召喚されるのである。フランスのオオカミはあなた方のすぐ背後にいるが、文明を脅かす野蛮さのような、都市の城門でのオオカミといったおとぎ話的なモデルに基づいてではない。それは、むしろ共棲者のやり方によってであり、特定の人間的実践(現在の羊放牧の特定の形態)としばしば矛盾した利害にもかかわらず、あな

た方の中で繁栄しようとするやり方によってである。こうした利害は、しばしば別の人間的实践や価値と合致している(オオカミの帰還は、特定の生物多様性を蘇らせる食物連鎖を回復させる)。ノン・ヒューマンへのエコロジー的外交術は、内政である。すなわち我々の中の共棲者(「ヘテロではあるが、相互に依存している」(Hache, 2011))に向けられているのである。

我々は、おそらく、我々の中の、それぞれのローカルな片隅(放牧とのコンフリクトがあるような場所)で、オオカミと交渉し妥協するために、こうした外交官が必要なのである。インドのこうした地帯ではハゲワシの外交官が必要である(ハゲワシがいないと肉がもはや解体処理されないという、重要な衛生的リスクを生み出す)。すべての受粉種に、すべての珊瑚礁に、すべての活動的な関係に対して外交官が必要なのである。

抵抗するものはすべて名前を獲得する。それは政治へと上昇する。気候温暖化は、我々のあらゆる活動に制約を課すことで、名前を獲得する。ある人々はこれをガイアとさえ呼ぶ。我々に効果を及ぼすものすべてが名前を獲得する。それが生き物である以上、それは活発にコミットする。すなわちそれは、利害も獲得するのである。海洋の生命共同体は海洋そのものが、もしくは気候が持っていないような活発な利害を有している。こうしてそれは、近代人に固有な大地の平板化から復興する。だからうまくやらなければならない。ここにこそノン・ヒューマンに対する、とりわけ生き物に対する、莫大な外交術的なプロジェクトがある。つまり生き物たちは、これまでなおざりにされてきた共棲者として我々の中に立ち上がり、我々が、彼らと取引し、交渉し、妥協することを要求する。外交官は、立ち上がったノン・ヒューマンに対峙して、彼らとともに、いかにして、よりよい共通した世界を作り上げるかを実践的に見いださなければならない。しかも、独特の沈黙の仕方を持っている——われわれのロゴスによっては理由付けをせず、我々の言葉によっては定式化

せず、我々の取り決めの仕方によっては協定や合意を取り交わさないような独特のやり方を持っている——彼らと、なのである。

これらの共棲者たちは、きわめてオリジナルなやり方で(ラトゥールがよく見ていたように)我々に訴える。すなわち我々が最適には、また合理的にはその使用を管理してこなかった単なる手段としてではなく、またサンクチュアリ化されなければならない絶対的な目標としてでもなく、である。むしろ、それは手段と同時に目標でもあるような(その地位が逆転可能であるような)存在として、我々に訴えるのである。共棲者たちは手段である。というのもまず、我々が、代弁者を通じて彼らを立ち上がらせるのは、彼らの脆弱化が我々の生命を脅かすからである。農業により沈黙する受粉ミツバチや鳥たち(Carson, 2011)が、外交上の対話相手となり、我々の生活に政治的に統合されるべき集団となるのは、実のところ、まずは我々にとって驚異があるからである。しかしそれと同時に、彼らへの我々の依存を示すことで、またいかに彼らが貴重であるかを示すことで、彼らは、手段以上のものとなり、我々はこれを目標としても見なすようになる。それ自体として内在的な、もしくは固有な価値を有しているのかを誰が決定するのかという、環境倫理学の困難な問題(生命中心主義、もしくはパトス中心主義、生態系中心主義)を必ずしも通じることによってではなく、彼らが、我々がそうであるところのゆえに、我々を登場させるからである。すなわち、我々とは、「進化の冒険旅行の同伴者」(Leopold, 2000)であり、我々がこれまで制御し、物化してきた別のエージェントによって織りなされ、これに依存しているエコロジーのエージェントなのである。彼らが目標となるのは、その脆弱化によって、彼らが我々にとって決定的に重要であることを可視化させるからであり、感謝を引き起こすからである。受粉ミツバチは我々の感謝を引き起こす。医薬品ジクロフェナクにより毒されたインド・ハゲワシが消失している。その結果、村々が不衛生となり飲料水源地

が汚染され、人間の疫病が増加した。ハゲワシが、数百万の「聖化された」牛の肉を解体してくれたからこそ、すべての地域を掃除したのである。つまり固有なるエコ進化的な彼らのパワーとは、病原菌にとっての袋小路となることであり、ハゲワシがこれを代謝し、無力化するのである。対照的に、彼らは感謝を引き起こし、もはやたんにゾロアスター教徒（パールシー）（ハゲワシは死者の沈黙の塔のなかで、彼らの亡骸の昇天を保証するとされる）だけではなく、（ハゲワシの消失による同様の影響に苦しむ）インドのあらゆる国民の感謝を引き起こすのである（Van Dooren, 2014）。我々は、あるモノにたいして感謝を持つのではない。むしろ、あるモノに対する感謝を有するやいなや、このモノは別のモノ、すなわち存在となるのである。それは、尊敬やケアの形態、共棲といった形態を喚起させるのである。

閉じた社会 socius のヒューマンの間のそれぞれの隙間で、古い資源、古い雑音、古い不可視なるものが共棲者へと復興し、立ち上がった。こうして共棲者は、政治的、倫理的な処遇を要求し、我々の慣行や実践を交雑させるべく訴え、我々自身についての表象そのものを変容させる。これらの共棲者（その他者性は還元不可能なままであるが）と区別がつかないほどの、エコロジックな共同体のメンバーとしての我々は、受粉ミツバチや土壌のトビムシ、オオカミ、羊から作られており、我々はこれらとともにひとまとめにされる（望もうが、望むまいが）。

外交という観点から状況が定式化されるやいなや、他者性が特殊なやり方で復興する。すなわち他者性が復興し、対話相手となり、それが固有な利害を有するのである。利害を持つものはすべて、取引において、別の利害を我々にまで押しつけ、交渉に入る。こんなふうにして、共棲者たちが登場する。それは、インド・ハゲワシの場合におけるように、彼らの脆弱さによって、しかしそれと同時に、エコ進化に由来する彼らの肉体的、また行動的な固有な強さのためにも、登場するのである。共棲者たちが

脆弱であるからこそ、我々は彼らを見るのであり、しかし、彼らが関係に入り込むのはそのためではない。すなわち、我々の利害と絡み合った、特異なる、彼らの利害と彼らの強さが配慮を訴えるからなのである。

外交術は、他者との構成的関係を受け入れようとする物語のタイプであるが、彼らが維持している他者性を同化し尽くすことはない。我々を彼らに結合している錯綜のもつれを承認しつつ受け入れようとするのである。他者性とのこうした親密な関係が、実践とアイデンティティの新たなマトリクスとなるのである。

（2）大きな物語から、状況詳述的ジャンルへ

人新世という考えのなかには、哲学者によって容易に受容され、理解される安逸さがある。宇宙のレベルで、高みから再び語り始めるといふ安逸さである。下界の存在は不明瞭となり、ローカルな問題が遠ざかるような高みであり、エレガントな暗号の中で戯れる壮大な抽象が、またもや、哲学的言語に固有なこうした幻想によって、宇宙とヒューマニティの未来を掌握しているように見えるような高みである。ローカルな問題に立ち戻ること、すなわちその都度、状況を詳述された土地に着陸することは、言説の別の様式を要求するのである。

したがって我々が必要とするのは新しい大きな物語ではなく、字義通りの、新しいジャンルの物語である。ローカルな物語の、（いくつかあるうちの）ある一つのジャンルは、マルクス的な意味でのイデオロギーではなく、同一の地域について別様に地図を描くための環境的な「概念的文法」（Bonnieuil et Fressoz, 2013）である。つまりそれは、アクターたちの理論的、実践的な想像力を閉じた場所から解放させるために、もしくはたんに異なった視点を登場させるために、問題を定式化し、状況を語り、別様に争点やアクター、関係を規定するさいの一つのやり方なのである。

問題は、いくつかあるうちの一つの物語ジャンルとして、外交術的共棲を考えることと関連

し、この物語が解放的である条件、つまりこの物語が何事かに役立つさいの条件、理論的、実践的なポテンシャルを解放する条件を確立することと関連しているのである⁸⁾。外交術的共棲は、ノン・ヒューマンとの、とりわけ生き物との関係の問題を別様に定式化し、したがって存在させるための、概念的文法をなしている。しかしこの外交術はおそらくにも新たには発明しない。多くの実践はすでに外交術的であり、この物語は、実践にそのすべての広がりと同視性、その可能な接合を与えるための一つの文学ジャンルにすぎないのである⁹⁾。

このジャンルが際立たせることができる中心的モチーフは、いわば超ヒューマンな意味で、固有に政治的なものとして、生き物との関係を解釈することである。すなわち他者とは、管理されるべき資源、もしくはサンクチュアリ化されるべきパーソンにしかすぎないものでなく、手段＝目標としての共棲者なのである。それとともに登場する問題は、この共棲者との潜在的な共通な主張の問題、それとの活気ある同盟、妥協 *modus vivendi* の問題なのである。それは、共有された地域での、交雑したマルチ・スピーシーズ的な集団の間での共棲の、歴史的で移ろいやすい、脆弱な、変容可能な関係という意味で、政治的なものである。

外交術的共棲において、(外部の自然手段を活用する) 内部のヒューマン・目標と、外部の自然・手段との間での存在論的、トポロジ的な大分割はもはや存在しない。すなわち我々の目の前にある地図は、錯綜した共棲者との複雑で、脆弱な政治的関係をあらわにしているのである。それではなぜ、概念としてのハイブリッド化は、こうした交雑のモデルを構成することができないのであろうか。ハイブリッド化は、ヒューマンへとすべてを均質化することで、他者の他者性を解体する傾向にあるからである。外交術的共棲の関係的モデルはむしろ同盟である。というのも同盟は還元不可能な他者性の間での親密で、潜在力ある合成の範例的形態だからである。すなわち異質性の合成、指針として

の相互主義的妥協と、やむを得ない場合のコンフリクトの最小化である。同盟という観点からの状況の定式化は、気候温暖化の背景において妥当性を得ることができよう。それは論点の切り口を変え、今のところ目に見えない同盟、破棄された同盟を——エコロジー的相互作用の歴史性と可塑性として——可視化させるであろう。

なぜ外交術的な物語が人新世に適切なのであろうか。この外交術が妥当な態度であることがわかるのは、以下のようなときである。すなわち、それに対してすべての権力を我々が掌握しているのではないような存在と共棲しなければならないときであり、こうした存在が彼らの固有な(しかも我々自身の利害と錯綜し、我々のそれと区別しがたいような) 利害を有する場合である。人新世の問題は他者についての我々の影響を受け入れることと関連している(我々が他者を統合し、同化吸収したなどと考えるはいけない)。態度としての外交術は、力関係を受け入れ、生き物たちの世界への我々の権力の限界を受け入れる。すなわちこの外交術は我々をして、あらゆる創造の責任者にさせ、それから独立したもの (*stewardship*) へと仕立て上げるのではない。つまりそれは、行為すること(しかも支配することができるという幻想なしに)を可能とさせ、交渉すること(純粹無垢にでなく)を可能とさせ、他の生き物たちと妥協することを可能とさせる物語なのである。

IV 活気ある同盟を打ち立てること

外交官はすでに、至る所に、現場に存在しており、彼らは、共通の主張を、つまり地域の持続可能な使用法＝慣行と生き物との間の同盟を追求している。彼らは関係そのものの利害を追求する。共通の主張と活気ある同盟は、自明ではない。つまりこうした同盟はマルクス主義的な意味では客観的であるが、発見され、定式化され、布置化され、焦点化され、しばしば発明されなければならない。これらを目立たせるの

が外交官の仕事である。共通の主張がありそうもないと思われるところでさえ、これを発明することができる。近代人たちが無関心もしくは有害さしか見ないところでは、活気ある同盟を立ち上げることが重要である。外交術はまず、錯綜した利害を目立たせることから始まり、次いで、最終的に活気ある同盟に転移させるために、そこに共通の主張を追求し、その都度ローカルな人間共同体と、その共棲者(生きたノン・ヒューマン)との間の関係のために働く¹⁰⁾。

問題の核心は、外交術的共棲の文学ジャンルの中心的モチーフである、こうした活気ある同盟について、誰に対して語り、したがって目立たせることができるかを決定することと関連している。共棲のコンフリクトに関して興味深いのは、ヒューマン一般とノン・ヒューマンとの間でのコンフリクトが根本的に問題となっているのではないことである。共棲が不可能であると、最終的に結論づけようとするすべての人々の問題設定があるとしても、それは、より詳細な現象をゆがめてしまう。ピレネーの熊の例が雄弁に物語っている。放牧に関わるすべての人は、熊が一般的に放牧活動の敵であると主張する。人は羊を飼育し、熊が、こうした活動の敵であろうというのである。しかし、異論を唱える人々が、こうした物語を断片化させる。すなわちピレネーの一部の羊飼養者や放牧者は、山での熊の存在を擁護する。結局、逆説的に見えるのは、関係の外交術の深遠な意味なのである。つまり彼らが支持しているのは、熊の存在が、より小規模な家畜群へと放牧技術を変容させ、羊番の仕事をもっと集約的にさせることで、山岳地帯での完全雇用を保証するのである。熊は、持続可能な農村の人間活動の衰退に反対して闘っているのである。相互主義的な観点から立て直してみると、この捕食動物は、特定の生活様式、特定のタイプの社会経済的実践の、思いがけない同盟者となり得るのである。これらの牧羊畜産農家は、熊が放牧の客観的な同盟者であると主張し、放牧の別の観念を主張する。あらゆる問題は、こうした使用方法の間での区

別を登場させることなのである。

こうした提案が可視化させるのは、当該の生き物たちが対立しているのは、無差別な人間一般に対してではなく、人間による特定のタイプの地域使用方法に対してなのだ、ということである。ノン・ヒューマンが同盟し、対立しているのは、常に、地域の特定の使用方法なのである。この点は、Patrick Degeorgesによって、オオカミの事例についてよく示されている。彼は、実態調査に基づいて、オオカミの帰還が敵となるのは、どのような土地の使用方法であるかを、詳細に特定するという作業を行っている¹¹⁾。こうした問題は複雑であるが、ある程度においては、オオカミは放牧一般の敵ではなく、たいていの場合、特定のタイプの技術的軌跡の敵なのであり、つまり精肉生産向けの、保護が困難な、大規模な粗放的羊家畜群を伴う牧場経営 ranching の敵なのである¹²⁾。この牧場経営は、植物による土壌被覆に圧力を加えることで、土壌から水分を蒸発させるリスクを冒し、このことは、持続性の観点から議論の余地の多い経済モデルと関連づけられる。Patrick Degorgesによって提起されているように、問題は以下ようになる。地域の変容のどのような軌跡によって、オオカミとの共棲が同盟となるのであろうか¹³⁾。我々が一般化させようとするのがこうした理由付けである。すなわち生き物たちはどのような土地の使用方法和同盟するのか、である。彼らは、人間的使用方法の変容のどのような軌跡と同盟するのであろうか。彼らはどのような使用方法に反対するのであろうか。

(1) ミツバチと特定の地域使用法との間の、潜在的で活発な同盟について

我々はここで、使用方法の間での区別という、こうした鍵概念を、家ミツバチの現代的危機という詳細な問題に適用させたい。ミツバチの蜂群崩壊症候群は、1990年代に始まり、2007-08年に明示的な政治的エコロジーの主題となった。この症候群は、家ミツバチという受

粉者と、我々のエコシステムの別の膨大な領域（受粉される植物——野生であろうと栽培種であろうと——）との間での依存関係に照らして、大問題となった¹⁴⁾。欧州で栽培される品種の多く（国立農業研究所INRAによれば84%）は、受粉者に依存し、その90%以上は家ミツバチなのである。経済学者たちはミツバチ消失による農業と野菜への膨大な費用を、別のものたちは公衆衛生における膨大な費用を急いで計算する（Smith et al., 2015）。

ミツバチのこうした消失における農業や殺菌剤、除草剤の役割の問題がすぐに中心の問題となった。ネオニコチノイド系農薬が禁止されたが、死亡率には目に見えるほどの効果がない。このことはこの農薬が、ミツバチ衰退の唯一の原因ではあり得ないということ以外には、何も明らかにしない。特定の植物防除剤もまた、たとえ少量でも、ミツバチの方向感覚を弱めると疑われている。

事実、この特定事例についての国際研究の多くが、多くの要因について、それだけを取り出しては原因がないとしている。すなわちそれは確かに多くの要因によるものである。欧州の研究報告書Prevention of Honey Bee Colony Losses (2012) はまとめている。すなわちウイルスと結合したミツバチ・ヘギイタダニVarrona destructorをとりわけ原因としなければならず、これがおそらく、蜂群の生存にとって主要な脅威であろう。しかしこの調査は以下のようにも追加している。寄生虫と病原菌、農薬との相互作用が、ミツバチの個体の健康に影響を及ぼし得る、というのである。多くのエコロジストたちは決定的に、ネオニコチノイド農薬を断罪し、それに対して大規模食品企業はこれを無実とする傾向にある。

ここでの問題は、こうした複雑な論争において判断を下すことではなく、以下のような主張を擁護することである。すなわちこの問題の多くの要因からなる次元を持った行為は、根本的に外交術的なのである（現在の人間的利害の間ではなく、私の関心を引く意味において）。す

なわち、特定のノン・ヒューマンと特定の人間活動との間での共通の主張を特定することである。こうしたアプローチは、我々が正確で、特定された主張を知らないということを承認することから始まる。それならば、多要因的な謎めいたことが、どのようなてんで、こうした古典的な論争状況において、外交術的手段を可能とさせるのであろうか。私にとっては、こうした状況の外交術的解釈は「全国食品・環境・労働衛生的安全性庁Anses」により、2015年に定式化されている（事実においてではないにしても、その文言において）。

結局、Ansesは2012年に、ストレスの様々な要因へのミツバチの同時被爆と、ミツバチの蜂群の衰退、脆弱化、高死亡率の現象におけるその作用の問題について、独自の調査を行った。その手法は、生態学的思考に固有なシステムのアプローチに基づいており、毒性についてのミクロ生物学分野で働いているすべての人々にお馴染みのものである。つまり重要なのは、切り離された細胞の単一の化合物の痕跡なのではなく、細胞の間でのシナジー効果が問題の中心にあり、複合的な関係が重要なのである。

彼らの関心を引くのは、諸要因の間での相互作用の問題である。すなわち「専門家の知見は、ミツバチの蜂群の死亡率の原因の多要因的性格を強調し、その脆弱化の決定における、農薬と感染原への同時被爆の役割を明らかにした」（Anses, 2015, p.2）。こうした背景において、Ansesはこれらの要因全体に介入すること、とりわけ生物多様性の維持を通じて、また「養蜂のグッドプラクティスの理解と遵守」を通じて、さらに農業投入物へのミツバチの被爆の全体的減少を通じて、こうした要因全体に介入することを勧告するのである（同上）。

ここにこそ、専門家の報告をめぐる、外交術的解釈と呼ぶことができるものがある。不確実性の状況において、この報告書は、行動にかかる不確実性の効果を逆転する。すなわち、行動を麻痺させることよりもむしろ（どの正確な要因を変容させるべきかわからないから）、それ

はシステムのインテリジェンス行動を引き起こす。すなわち要因全体に介入することである。それを Anses は「養蜂のグッドプラクティス」と呼び、これに「農業的」を追加しなければならない。こうした展望において、ミツバチは、より持続可能な土地の使用法と実践への移行の客観的同盟者となる。必然的に多要因的で、受粉者の脆弱化の「多様な」条件と結合したものととして、この症候群の問題をこのように解釈することは、当該の土地を、グローバルに、より持続可能な使用法へと方向付けるための梃子となる。すなわちミツバチは、(投入物の使用においてより適切な) 農業の客観的同盟者である。その受粉者をストレス条件(中期的に農業にとって自己破壊的である)におくことを断念させる農業の同盟者なのである。

こうした具体的な事例において、客観的な同盟はシステムの的であり、正確な一つの農業の、たった一つの直接的な告発よりもいっそう強力である。そこに逆説がある。すなわちエコロジー的には、より持続的な使用法へと移行するために、この症候群が、私たちに対して、養蜂の仕方と農業の仕方を変化させるように指し示さなければならないであろう(この症候群がたんに、一つの農業の禁止に至るよりも。それはすぐに別の農業に置き換えられるであろうから)。Anses がよく理解していたように、告発されているのは一つの投入物ではなく、多要因的なストレス条件であり、それは、生きた地域の資源採掘主義的使用、それ以上のものでもそれ以下のものでもないのである。こうした破壊的な多要因的ストレスが、持続的ならざる特定の実践と結合していることを指摘することで、またミツバチが我々に変えるように命じるのがこうした実践であることを指摘することで Anses の意図を拡大しなければならない。穀物以外の我々の植物の多くの割合、多くの野生の植物(ミツバチはこれらの生存と進化を保証している)の受粉者として、また魅力ある生活形態として、ミツバチが、我々の中で、それ自身として生き続けなければならないとするなら

ば、である。ミツバチは、より持続的な農業への実践の変容の客観的同盟者となる。これから以下のような仮説について経験的に調査しなければならないであろう。すなわち必要なミツバチを救うために必要なエコシステムのより持続的なこうした使用法は、それを実践する人間の生活と労働の形態の同盟者でもある。外交術的なアプローチから問題を解決することは、まずは、責任者を探し出すことではなく(それでも、それは必要である)、構成的関係に資するシステムの解決策へと注意を移動させることである¹⁵⁾。

それがいかに、大地についての別のイメージ、生き物への我々の関係の別の観念であることがわかる(たとえ、支配的言説によって不可視化されていようと、土地の無数の実践が、これまでこの別の観念を適用してきたし、現在も適用しているとしても)。すなわちすべてが関連しており、すべてがデリケートなのである。一つの資源を殺すのは、厳密に一つの化学製品なのではなく、実践システムなのであり、これが、複雑な行動をする存在にストレスを生み出し、(学習と精練されたコミュニケーションに由来する)微妙な方向感覚を破壊し、このことが彼らの生命を生きられなくさせる。だからこそ、こうした「空の巣箱」現象を解決するためには、彼らの方向感覚を破壊する多様な要素について探求することができる外交官=ミツバチを検討することができるのである(Karl von Frisch (1974) のように)。これはたんに生理学だけの問題なのではなく、それはエソロジー(比較行動学)の問題でもある。すなわちそれはたんに、ミツバチが直接、毒されて死ぬということだけではなくて、ミツバチが自分の巣箱を探せない、ということなのである。生き物はもはやたんに、物理化学的なことだけに属するのではなく、生き物は自らの微妙な行動的側面を有しており、争点となっているのはこの側面なのである。これらの存在は、システムのことのすべてに対して繊細にフィードバック効果を及ぼすのだから、したがって、より持続可能な

それへの実践システムの変容における微妙さ以外には解決はない。すべてが作用する、すなわち、生き物たちのシステムにおいては、一方通行的で、単一要素的で、その他から切断された因果連関の観点から理解でき、管理できるようなことは何ひとつない。そしてこれこそが客観的な同盟を打ち立てる。すなわち実践は互いに依存し、利害は区別がつかない。それこそまさに、主張が共通であるということである。なぜならば、我々は他者に曝されて生きることを運命づけられているからである。すべては結合されている。それは、自然との混交という神話的な感情に関心を向ける宇宙論的なエコロジーにおけるような、全体に結合されているのではなく、別の正確なものに結合され、予測不可能な軸によって、これらはまた正確な、錯綜した別のものへと次々に結合されている。そして我々に対して、ある一つのことをケアするように命じることは、このケアが拡張することを意味している。

それならばなぜ、ミツバチの事例が外交術の興味深い事例をなしているのであろうか。それは、ミツバチが、たんに目標であるだけでなく、手段でもあるからである。ミツバチはTurkanaの象やオオカミとは異なった立ち上がりかたを持っているからである。象やオオカミが立ち上がるのは、特定のエコロジー的意識が、その存在の事実そのものによって、これらを評価するからであり、我々の集合的存在の直接的手段ではなく、これらは、生産的関係には直接的には関わらないからである。しかしながらミツバチは別の仕方でも立ち上がる。それは、政治的エコロジーにおいて最も根本的で、最も見事なやり方である。すなわちミツバチが、我々の生活を可能とさせる諸活動のループにおける本質的な要素であることによってである（ここでは、例えば野菜の受粉）。ミツバチを脆弱化させることで、我々は自らの生活条件を脆弱化させる。ミツバチは我々が破壊する手段として立ち上がり、そうすることで、ミツバチは手段以外の別のものとして可視的となる。さらにそうする

ことで、ミツバチは我々に対して、新しい方向、変容の軌跡（ミツバチ自身がその客観的な同盟者である）を我々に指し示す。ここではエコロジーは、もはや、ミツバチを還元不可能な目標へと仕立て上げるために、我々に対抗して、人間の使用方法すべてに対抗してミツバチを擁護するのではない（たとえしばしばそれが必要であるとしても）。エコロジーがミツバチを擁護するのは、地域のよりよい実践の同盟者として、より持続的で、より敬意に満ちた、システム的で、レジリエントな使用方法への技術的システム全体の変容の軌跡の同盟者として、なのである¹⁶⁾。それは、よりデリケートな使用方法なのである。ここにこそ、人新世統治の新しいスローガンがある。というのもはやシステム論的なことしかないからである。システム論的なことの適切な政治は繊細な配慮にある。政治的なことは、ここでは、種の議会ではなく、むしろ変容の軌跡への開放とコミットメントなのである。

これらの活気ある同盟において、我々自身の中にいる生き物こそが我々の外側の生き物と同盟する。というのも彼らの利害が、我々のそれと区別がつかないものとして登場するからである。彼らの利害が考えさせるように促すのは、生きている世界を破壊するものは、人間の存在条件にとっても有害であるということである。疎外は種を超えたtaransspecifique現象なのである¹⁷⁾。

(2) マルチ・スピーシーズな疎外

しかしながら、人間以外のこれらの他のものたちが、地域のよりよい使用法の主張に役立つから、これらが生きるに値し、もしくは尊重されるに値する、と主張することが重要なのではない。すなわち生きるに値するという問題は、ここでは、問題の核心ではない。というのも、われわれはここでは倫理の領域でこれを議論しているのではなく、その固有な対立によって、政治的なことの領域で議論しているからである。むしろ共棲すべき種（ミツバチやインド・

ハゲワシ、オオカミ、熊、Turkanaの象など)との同盟が、強いられたローカルな同盟なのではないということを示すこと、同盟が、(より解放的な人間活動と、全体としてのエコシステムとの間での関係にとって、より寛容な)実践に向けて、土地使用法の変容を促すという点で、同盟が意味を持っていることを示すことが重要なのである。

結局、人間生活の条件としての、生き物との我々の関係の現在の危機状況において、人間を疎外する装置はノン・ヒューマンを疎外するのと同じ条件である、という仮説を立てることは、不当ではない。厳密に経済的な利潤のためにあらゆる共棲を軽視しようとする人間活動は、そこでの労働者の解放を、より開花的な生活形態への彼らのアクセスを軽視する人間活動でもある。こうした人間活動が、そこにいるヒューマンとノン・ヒューマンなアクター全体の生活条件を犠牲にして展開している。労働者の生きた環境を根本的に破壊し、もしくはその一部を軽視しなければならないあらゆるタイプの活動は、労働者にとって解放的であるとは言いがたい。とりわけ大量の投入物によって土壌の生命を破壊する農民にとって解放的であるとは言いがたい。彼らはしばしばその第一の犠牲者であり、それが「緑の革命」の結果であると推察されている(Bourguignon et Bourguignon, 2008, p.41)。

ここで強調されるのが、エコ心理学的な逆説である。すなわちノン・ヒューマンと関係のある人間活動はすべて、例外なく、次のような選択肢の前に立っている。つまり生き物との複雑で、脆弱なパートナーシップの観点から自らを考えるのか、それとも、素材へと物化された生物共同体のコントロール(その根本的作業は、最大限の利用/有害物の根絶という対である)の観点から考えるかである。ところが、ここにこそ逆説がある。ここでは、合理的進歩としてのそのイデオロギー的正当化にもかかわらず、第二の軸の選択は、——もしそれが地域の生き物の大部分にとって破壊的であるならば——、

結果的に、実践アクターたち自身にとって疎外的であることになる。

その結果として、以下のように主張される。本質的に、生き物との外交術的である実践形態は、これを適用するアクターたちと人間共同体にとって、開放的で、開花的である。この場合、外交術的なパーマカルチャーないしアグロ・エコロジー実践者の巧妙さが際立っている(Gruyer et Gruyer, 2014)。鋤で土地を文明化するための、また収穫の敵を屈服させるための、額に汗して生計を立てるための、戦いの創世記的なパラダイムから、彼らは、これほどにも遠く離れているし、また彼らが耕作しているものとの緊密な同盟に、かくも穏やかに沈潜しているのである(一方の有害物を他方の補助材へと変容させようとして)。もちろんすべてがバラ色である、と言いたいわけではない。すなわち、特定の作物にとっての有害物は存在するし、寄生虫や捕食者は存在する。たんに、こうした生き生きとした現象に関わるやり方が変化するのであり、したがって、農業実践とそれに関連した経済実践が変化するのである。すなわちもしこれらの生き物を、生産を最大化する人間的運命にとっての不幸と理解するならば、これらはそれ自体として有害である。我々は、緊密で、複雑な政治的関係へと同盟を発明しなければならず、対立を最小化させ、もしくは回避しなければならず、複数の関係を結ばなければならず、競争を相互主義へと転換させなければならない。もしこうした政治的な関係において、生き物たちを、我々とともに捉えられている共棲者パートナーとして理解するならば、その搾取との戦争状態から、(そのアグロ・エコロジー的共同体との、お互いにとってより持続可能な)複雑な同盟の状態に移行する。パーマカルチャーのすべての側面が、メチエ(仕事)の本義は、対立の論理から生き物とのパートナーシップへと移行することと関連している、と常に明らかにしている。ここで主張されることは、このパートナーシップが実践者自身を実際に解放させる、ということである。流通様式に

おける地産地消は、客観的同盟として、これに接合される。こうした同盟は、生産者や消費者、生き物といった多数のアクターたちを大規模に結合させるのである。

その結果として、特定のノン・ヒューマンたちの中での活気ある同盟が、地域の実践や使用方法と結合される。こうした実践は現在の背景において、生物共同体にとって、また人間活動にとっても、同時に、より持続的である。それは、人間活動が人間らしいという点においてそうなのである(すなわち労働者の存在条件についても、労働者が自らの労働に与えることができる意味についても)。

こうした仮説は、その都度、経験的に試験に賭けられている。ここでは、この仮説は、ア prioriに必然性としてでも真実としてでもなく、傾向として主張される。すなわち、現在の西洋的生産活動の資源略奪的な特性に照らして、多くの場合、共棲にいつそう関わっている実践は、同時に、エコロジー的に、いつそう持続的で、人間的にもいつそう堅実な実践への、当該地域の移行に寄与するであろう¹⁸⁾。もちろん、多くの特定の場合では、現実の複雑さの頑固な特徴を考慮すれば、こうしたことは当てはまらないであろう。すなわちすべての問題は、共棲が、人間とノン・ヒューマンからなる共同体において、より持続的な方向へと解放する場所を決定することと関連している。こうした明快な方向性は、我々の大地の使用方法を変容させる望ましい軌跡について、アクターたちの想像力を解放することに貢献することができよう。

原注

- 1) この点に関してはClive Hamilton (2015) の批判的論文を参照せよ。彼はgood Anthropoceneのアクターたちを紹介している(Erle Ellisを中心に、とりわけManifeste eco-modernisteの著者たちを中心に)。Virginie Maris (2015) は、人新世的ハイブリッド化の大きな物語によって導入される保護政策についての批判を提示した(例えば、Peter Kareivaにより主張されるnew concervation)。これは、人間と自然との間の関係を考察するために、こうしたアプローチの有害性を明らかにする。
- 2) 生産的人間活動を、またあらゆる活動の痕跡を免れた、古典的な意味での「野生wilderness」がなお存在している。しかし、人間活動によって影響を受けないとは言え、生命空間の、より根本的な、しかし広範な意味では、状況はまったく異なる。それはまさに、人新世という考え方の論理に対応しており、それは、最も人里離れたところでさえ、グローバルな気候温暖化によってか、汚染物質の大気や海洋への大規模な拡散によってか、影響されるということの意味しているのであり、このことは、大地の生物共同体「すべて」の生命の条件を修正するのである。
- 3) 私は、棲むことという観点から、他者性としての生き物という考え方を概念的に基礎づけようとした(Morzot, à paraître)。
- 4) ラトゥールの社会学に由来する「ノン・ヒューマン」という観念は、気候温暖化や土壌浸食、エネルギー、(これらを存在させる)ネットワークを大規模なレベルで検討することを可能とさせる。この観念は多くの問題を定式化し解決する。このことを再論する必要はない。ここでの目論見は、生き物についての種別的な観念を描き、ノン・ヒューマンにおける彼らの固有の争点を隠蔽しないことである。個体もしくは倫理的な人格として考察される生き物ではなく、相互依存的なものたちの生物共同体として、政治的レベルで考察される生き物が重要なのである。彼らの種別性が重要であるのは、こうした作業が、生き物の危機と、また生き物への我々の関係の危機に注目しようとするからである。こうした探求が生き物に対して種別性を付与する、というのは、生き物が、行為するパワーに加えて、苦しむパワーを有しているからである。だからこそ彼らは利害を有する。このことが、ミシシッピ河(いかにエージェント化されてagentifiéいても)と、ミシシッピの生物共同体(この河がもたらす共同体)との間の差異を作り出している。第二の差異は、彼らが棲んでいるという事実のために、これらの生き物に対して、ハイブリッドな合成において「再び活性化するreprendre la mainsパワー」を認めることと関連している(私はこれを野生化féralitéと呼ぶ)。このことによって、生き物との同盟や共棲、外交について語るができる。それは、ますますメタファー的ではなくなっている。というのも、強い意味での同盟に入り込むためには、利害を持たなければならないからであり(気候それ自体は利害を持たない)、また強い意味で共棲するためには生きていなければならないからである。
- 5) この表現はAchille Mbembeから借用している。

La France peine à entrer dans le monde qui vient, Libération, 1er, juin 2016.

- 6) この政治的技芸は「パースペクティヴィズムのperspectivistes実践」と「方法論的アニミズム」を要請する。これは、部分的には今後なお構想し、構築されなければならない。Morizot (2016), p.169-205を参照。
- 7) Isabelle Stengers (2004), p.23を参照。「最も重要なことは、とりわけ政治的な出来事であり、ドアの外で示威行動をし、アジェンダに考慮されることを要求する、新しい登場人物である。この人を受け入れるべきか。この人が提起する問題がうまく構成されることができるのは、どのような条件であろうか。さらに、特定の人たちが、ドアを叩いているに違いないと感じられるのに、彼らがそこにいないときには、どうすべきなのであろうか」。
- 8) この種の物語がすべての場合でうまくいくとは限らないことは大いにあり得るし、特定の背景では、反生産的であることもあり得る(たとえば、いかなる同盟も見いだし得ないときでさえ、厳密な保護主義が適切であるような場合)。しかしながら、この物語が妥当性の内在的限界を有しているとしても、アプリアリに、この限界を決定することは困難であり、それは、これがプラグマティズム的な認識論に依拠しているためである。すなわち物語としてのその妥当性は、論理的提案の真理とは区別され、それは、問題に照らして事後的にしか登場し得ない。すなわち、この物語は、試みられた後で、理解可能性の効果を、もしくは関係の再編の効果をもたらすことができたかどうか、が重要なのである。
- 9) ある意味で、外交術的共棲はつねに存在していた。それは、あらゆる種類の貧者たちのエコロジー主義(Martinez Alier, 2014)が意味することを理解し、我々の「自然」と、「与えるものdonateurとしての自然」と関係している太古の人々のあらゆるエコロジーが意味することを理解するための一つのやり方である(Ingold, 2000, pp.61-76)。
- 10) 実際の同盟の存在と、「外交術的共棲」というジャンルとを切り離すことができる、と指摘しておこう。もっとも、生産的活動が、(生物共同体を常に関与させている)エコロジー的ダイナミズムに基づいているという事実だけからも、この実際の同盟が、生産的活動の至る所であると、多くの指標によって考えることができようが。外交術的共棲は、なによりもまず、資源略奪的な、ポスト・ネイチャー的な、もしくは厳密に保護主義的な物語へのオルタナティブなタイプの物語をなしており、これは存在している存在物との可能な関係を部分的に変容させる。他方、実際の同盟は、外交術的共棲の文法のローカルなモチーフであり、闘争において生き物を活性化させるために、またアタッチメントを結晶化させるために、利害共同体を可視化させることに役立つのである。それはまた、経験の物語=地図を活性化させ、別のヒューマンによる暴力的実践に対抗して、特定のヒューマンと生き物との間での強い同盟を想像させることを可能とさせるのである。
- 11) 個人的な会話のやりとりから。
- 12) こうした分析は一つの傾向を取り出すに過ぎない。実際には、他のタイプの技術もまた、オオカミの帰還の影響を被っているものであり、たとえば、Laurent Garde (2015)の分析によれば、複数の活動を行う小規模羊飼養者はこのために、羊番と保護にそれほどの努力と時間をかけられない。このような場合、彼らの活動は補助金と他の多様な、地方公共団体及び制度的なイニシアチブによって守られなければならない。
- 13) 生き生きとした同盟の観点からの対応は、「捕食動物に優しい実践predatory friendly practice」の立場からする農業放牧プロジェクトの中に見られる。以下を参照。[URL:<http://www.predatorfriendly.org/index.html>], 2016年12月12日参照。
- 14) 新たに、それはまず、ミツバチの未来を我々のそれとの共通の主張へと格上げさせる経済への配慮がある。しかしまたもや問題は、経済的利益以外のレベルで、共棲の価値に場を与えるために、人新世的意識を覚醒させることと関連している。
- 15) 気候温暖化は、生態系のエコ進化的な軌跡を大規模なレベルで変容させることになる。この温暖化はこうした方向で、大地の使用方法の変容軌跡を、エコ進化的なそれへと収斂させるように、我々に命じるのである。
- 16) こうした考え方は、「変容的順応研究同盟 Transformative Adaptive Research Alliance」によって説得力をもって展開されている。もっとも特定の政治経済学的側面(いかなるタイプのレジリアンスと持続性なのか)は議論を引き起こす。以下を参照。Abel et al. (2016)。
- 17) ここでは、以下のように生き物との同盟の問題を考察することができるよう追求すべきである。すなわち闘争と争点の結集によるヘゲモニー構築をめぐる、エルネスト・ラクラウの観念に依拠することによってである。普遍的なことではなく、より豊穡な個individuを、つまり、より大規模な合成された政治体を構築しなければならない。以下のようなものたちとともに、すばらしい個へと結集した持続的農業(アグロ・エコロジーや有機農業、パーマ・カルチャー)を検討しなければならないのである。すなわち受粉ミツバチと妊婦、子供たち(彼女たちと彼らは、これらの受粉者たち

の消失によりもたらされるビタミン供給欠乏のために死亡リスクを増加させる), 持続的な農業実践を行う養蜂家たちが, 別の使用方法と別の利益集団に対抗して, 同盟し結集するのである。こうした結集が生起するのは, 自らの利益を計算する原子論的諸個人の間での契約モデルによってではなく, スピノザの個(エコロジ的共同体のなかで共有されるパワーを構成する)のハイブリッドなモデルに従って, また言説と政治闘争におけるヘゲモニックな結集のモデルに従って, なのである。こうして客観的の同盟の政治的エコロジーの実行可能な論理が想像される。すなわち, こうした同盟を立ち上げること, これを結集させること, 構成的関係のフォローによって, またネットワーク全体へのその副次的効果のフォローによって, リスクの予想によって, これらの同盟を拡張させること, である。それはマルチ・スピーシーズなヘゲモニックな結集であり, 多頭的で, しかし遙かに強力な政治体を創出するのである。この点についてはFederico Tarragoni (2015), Ernesto Laclau (2008)を参照。

- 18) 以下のように付け加えなければならないだろう。すなわちより持続的で, より解放的な使用方法に向けての同盟, 地域の変容に資するヒューマンとノン・ヒューマンの間でのこうした同盟は, たいいていの場合, 地域の使用法の別の観念に対抗して, 構築される。したがって, こうした同盟は闘争と戦線の輪郭を描き, 敵を別決することを可能とさせる。こうした移ろいやすい境界線は, 共棲者としてのノン・ヒューマンの地位の問題を修正し, 地政学としてここで見なされる生き物への関係は, おそらくしばしば, 明確な地図上の効果を持った断層線(Bruno Latour (2015)が「諸地球的なものTerrestres」と「ヒューマン」との間で描き出している)と合流する。

参考文献

- ABEL Nick, WISE Russell M., COLLOFF Matthew J., WALKER Brian H., BUTLER James R. A., RYAN Paul, NORMAN Chris, LANGSTON Art, ANDERIES John M., GORDDARD Russell, DUNLOP Michael et O'CONNELL Deborah, 2016, «Building a resilient pathway towards transformation when “no-one is in charge” : insights from Australia's Murray-Darling Basin», *Ecology and Society*, vol. 21, n° 2, p. 23.
- AGENCE NATIONALE DE SECURITE SANITAIRE, ALIMENTATION, ENVIRONNEMENT, TRAVAIL (Anses), 2015, *Co-exposition des abeilles aux facteurs de stress*, Avis de l'Anses, Paris, Rapport d'expertise collective.
- BONNEUIL Christophe, 2015, «Anthropocène», *Dictionnaire de la pensée écologique*, D. Bourg éd., Paris, Presses universitaires de France.
- BONNEUIL Christophe et FRESSOZ Jean-Baptiste, 2013, *L'événement Anthropocène*, Paris, Le Seuil. (クリストフ・ボヌイユ, ジャン＝バティスト・フレゾ著, 野坂しおり訳『人新世とは何か』, 青土社)
- BOURGUIGNON Claude et BOURGUIGNON Lydia, 2015, *Le sol, la terre et les champs*, Paris, Sang de la Terre.
- CARSON Rachel, 2011 [1962], *Printemps silencieux*, Marseille, Wildproject. (レイチェル・カーソン著, 青樹築一訳『沈黙の春』, 新潮文庫)
- DESCOLA Philippe, 2005, *Par-delà nature et culture*, Paris, Gallimard. (フィリップ・デスコラ著, 小林徹訳『自然と文化を越えて』, 水声社)
DOI : 10.3917/deba.114.0086
- DE WAAL Frans, 2016, *Sommes-nous trop «bêtes» pour comprendre l'intelligence des animaux ?*, Paris, Les Liens qui Libèrent.
- FRISCH Karl (VON), 1974 [1927], *Vie et mœurs des abeilles*, Paris, J'ai lu.
- GARDE Laurent, 2015, «Sheep farming in France : facing the return of the wolf», *CDP News*, n° 11, pp. 17-27.
- GRUYER Charles-Hervé et GRUYER Perrine, 2014, *Permaculture. Guérir la terre. Nourrir les hommes*, Arles, Actes Sud.
- HACHE Emilie, 2011, *Ce à quoi nous tenons. Propositions pour une écologie pragmatique*, Paris, La Découverte.
- HAMILTON Clive, 2015, «The theodicy of the “good Anthropocene”», *Environmental Humanities*, vol. 7, pp. 233-238.
DOI : 10.1215/22011919-3616434
- HAUSER Marc, 2001, *Wild Minds. What Animals Really Think*, New York, Owl Books.
- INGOLD Tim, 2000 [1994], *The perception of environment. Essays on livelihood, dwelling and skill*, Londres, Routledge.
- KYMLICKA Will et DONALDSON Sue, 2016 [2011], *Zoopolis*, Paris, Alma Éditions.
- LACLAU Ernesto, 2008 [2005], *La raison populiste*, Paris, Le Seuil. (エルネスト・ラクラウ著, 澤里岳史・河村一郎訳『ポピュリズムの理性』, 明石書店)
- LATOUR, Bruno, 1999, *Politiques de la nature*, Paris, La Découverte.
— 2012, *Enquête sur les modes d'existence*, Paris, La Découverte.

- 2015, *Face à Gaïa*, Paris, La Découverte.
- LEOPOLD Aldo, 2000 [1949], *Almanach d'un comté des sables*, Paris, Flammarion.
- MARIS Virginie, 2015, «Back to the Holocene. A conceptual, and possibly practical, return to a nature not intended for humans», *The Anthropocene and the Global Environmental Crisis. Rethinking Modernity in a New Epoch*, C. Hamilton, F. Gemenne et C. Bonneuil éd., Londres, Routledge, pp. 123-133.
- MARTINEZ ALIER Joan, 2014, *L'écologisme des pauvres. Une étude des conflits environnementaux dans le monde*, Paris, Les Petits matins-Institut Veblen.
- MORIZOT Baptiste, 2016, *Les Diplomates. Cohabiter avec les loups sur une autre carte du vivant*, Marseille, Wildproject.
- à paraître, «Le devenir du sauvage à l'anthropocène», *Comment penser l'anthropocène ?*, Actes du colloque, Collège de France, Paris, 5-6 novembre 2015.
- SINGER Peter, 2012 [1975], *La libération animale*, Paris, Payot. (ピーター・シンガー著, 戸田清訳『動物の解放』, 人文書院)
- SMITH Matthew, SINGH Gitanjali, MOZAFFARIAN Dariush et MYERS Samuel S., 2015, «Effects of decreases of animal pollinators on human nutrition and global health : a modelling analysis», *The Lancet*, vol. 386, n° 10007, pp. 1964-1972.
- STENGERS Isabelle, 2006, *La vierge et le neutrino. Les scientifiques dans la tourmente*, Paris, La Découverte.
- 2004, «Une pratique cosmopolitique du droit est-elle possible ?», *Cosmopolitiques*, n° 8, pp. 14-33.
- TARRAGONI Federico, 2015, «Vers une logique générale du politique : identités, subjectivations et émancipations chez Laclau» [en ligne], *Revue du MAUSS permanente*, 25 janvier, [URL: <http://www.journaldumauss.net/?Vers-une-logique-generale-du>].
- VAN DOOREN Thom, 2014, *Flight Ways. Life and Loss at the Edge of Extinction*, New York, Columbia University Press.

(2020年7月3日掲載決定)